

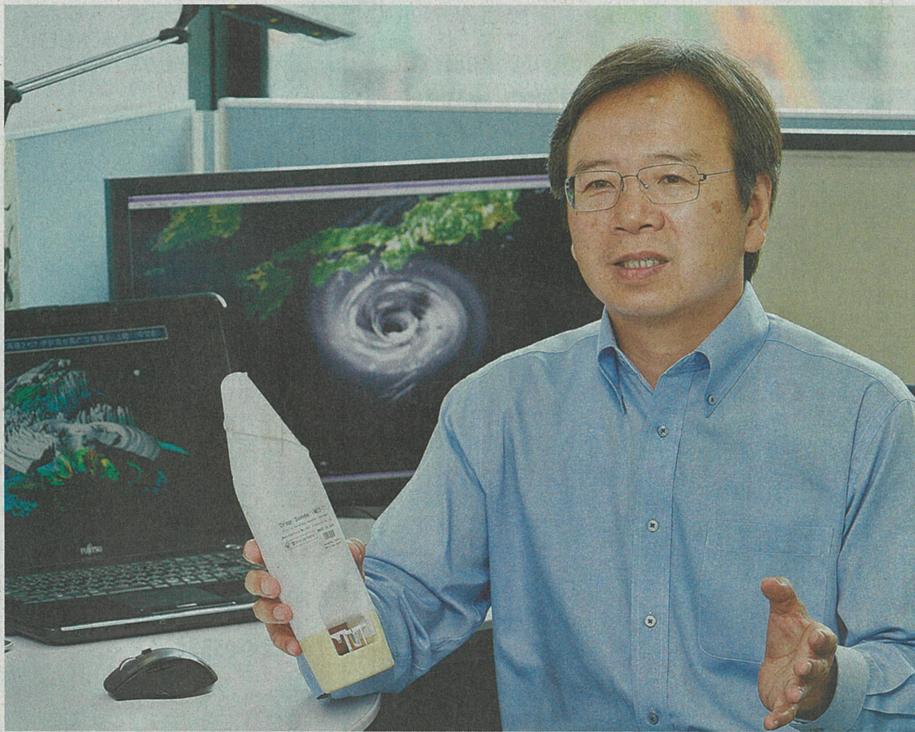
スーパータイフーン 飛行機で予測

温暖化で危険性が高まっている

「スーパータイフーン」など超大型台風襲来に備え、名古屋大宇宙地球環境研究所の坪木和久教授(五十)らのチームが、国内初の航空機を使った本格的な台風の直接観測に乗り出す。今月下旬に石川県能登半島沖で試験飛行を行った後、台風シーズンの八月〜十月に実施。進路や強さなど台風の予測精度を大きく向上させ、適切な避難に役立てたいという。(坪井千幸)



国内での航空機を使った台風観測は戦後、米軍が行い、日本にデータ提供していたが、費用面や人工衛星による観測技術の



観測装置「ドロップゾンデ」を手に、航空機を使った台風観測について話す坪木和久教授一名古屋市千種区の名古屋大で

発達で一九八七年以降、行われず、温暖化による海水温の上昇で、強い勢力を保ったまま日本に近づくと台風が増えており、予測精度の向上が課題となっている。

名大チーム 精度アップ、直接観測へ

スーパータイフーン 最大風速が毎秒67メートルを超す台風。建物が倒壊したり車が吹き飛ばされるほどの暴風を伴い、大雨や高潮が甚大な被害をもたらす。2013年にフィリピンに上陸したスーパータイフーン「ハイエン」は7000人以上の死者・行方不明者を出した。

観測精度の向上が課題となっている。名大チームの計画では、民間機をレンタルし、台風の十数キロ上空から中心域に向け、長さ約三十秒の筒状の測定器「ドロップゾンデ」を二十個ほど投下。ドロップゾンデから送信された気温、気圧、風速などのデータを独自開発したシミュレーションモデルに入力することで、台風の正確な大きさや強さ、進路を分析できるという。

今月の試験飛行ではドロップゾンデの投下実験などを行う。実際の観測は沖縄本島の南海上を想定しており、比較的、規模の大きい台風の発生を待って実施する。坪木教授は「今の台風予測では、強さや進路の把握に限界があり、スーパータイフーンが来れば大きな被害が想定される。航空機観測による正確な予測ができれば安全で確実な避難が可能になる」と話した。